

# 母をたずねて（三千里）

八柳 修之

長い距離を歩いた人々、今回は童話の世界、エドモンド・デ・アミーケスの「母をたずねて 3000 里」で知られるマルコ少年のイタリア、ジェノバからアルゼンチンに渡った子供向け童話の話です。

この話は 1976 年 1 月～12 月まで 1 年間、日曜日、フジテレビで放送された子供向けアニメ、「母を訪ねて 3,000 里」子供と一緒に見たものである。それから 5 年後、私はアルゼンチン駐在となり、通算 6 年、ブエノスアイレスで暮らすこととなった。駐在中、仕事や家族で地方を旅行し土地勘もあるので、マルコ少年がたどった町を想い出と共に辿ってみたい。タイトルの三千里を括弧としたのは、原作者エドモンド・デ・アミーケスの「クオーレ」の中に入っている物語は単に「母をたずねて」である。「クオーレ」とは、英語でいうハートのこと、原題は「アペニン山々からアンデスに山々まで」となっている。

（訳者：大久保昭男 ポプラ社 1999 年版）



三千里、ほぼ 12,000 km。西安・ローマ間、シルクロードの距離である。

三とか八という数字は多いというのを強調するとき、例えば「白髪三千丈」「嘘八百」「八百萬の神」のごときである。「母を訪ねて三千里」はフジテレビの制作者がつけたものである。確かに「母をたずねて」の原題では、視聴者に与えるインパクトに欠ける。また原作とアニメではストーリーも登場人物も違っている。例えば、マルコがブエノスアイレスに着いた後、最初に母を捜した町、バイアブランカ（ブエノスアイレスから 635 km、（大西洋岸の穀物の積出港）には行っていない。原作は短いので、アニメの制作者が 1 年間、放送するため原作にはない登場人物など大幅に膨らませた苦勞が伺える。原作は 1886 年、日本では明治 20 年の作品である。

## 物語

イタリアのジェノバで小さな事業を営む親子 4 人の一家。父親の事業が上手くいなくなり、借金が重なり返済のため高いお金が稼げるアルゼンチンへ母親が出稼ぎに行くことになる。母親はジェノバの商人の世話でブエノスアイレスの家庭で女中として働くこととなった。給金もよく 3 ヶ月ごとに送金があり、夫も借金を返済しつつあった。一年たった後、母親から少し身体の具合が悪いという手紙があり送金も途絶えた。2 度も手紙を出したが返事はなく、ブエノスアイレスの領事館に照会してもらったが判明しなかった。父親が妻を捜しに行くという話になったが、二人の息子たちに誰が食べさせるのか、借金の返済はどうなるのか。下の息子マルコが、自分がアルゼンチンに母を捜しに行くと言い出した。

13 歳の子が一人でアルゼンチンへ行くことに父親は難色を示したが、マルコの熱心さに折れて渡航することになった。父親の知人の友人の汽船の船長が三等（船底）の切符をくれ渡航。船は出稼ぎや移民の人で満船。一人ぼっちの淋しさ。船はジブラルタル海峡を過ぎると揺れ、船酔い、毎日同じ景色。ブエノスアイレスに着く少し前、ロンバルディア（北イタリア）のおじいさんと知り合う。この人はロザリオという町の近くで農家をしている息子に会いに行くという。出航して 27 日目、汽船は海のように広い。ラプラタ河の港に錨を下した。その直前、父親がくれた僅かばかりのお金を盗まれてしまった。

イタリアは 19 世紀の半ばまでいくつもの国に分かれていて、オーストリア、スペイン、フランスの

支配を受けることが多く、統一された国となったのは 1870 年、ローマを含む全土が統一された。日本の明治維新と同じ頃であった。(訳者：大久保昭男)

アルゼンチンではイタリアからの季節労働者のことをゴロンドリーナ（つばめ）と呼んでいる。



ここでアルゼンチンについて見て見よう。

国土面積：280 万km<sup>2</sup> 日本約 7.4 倍

人口：4,623 万人 (2,022 年) \* 首都圏

ブエノスアイレス 1,145 万人 \* 特別区

コルドバ 150 万人

ロサリオ 130 万人

ラ・プラタ 86 万人 \*

トゥクマン 83 万人

マール・デル・プラタ 70 万人 \*

ブエノスアイレスは特別区となっておりどこの州にも属さない。面積は 203 千km<sup>2</sup> (大田、世田谷、品川、足立区を足した面積)」センターに住む人々の多くは週末、近郊の別荘で過ごす。

人種構成

イタリア系 34.5% スペイン系 28.5% ドイツ系  
ドイツ系、フランス系、イギリス系、アラブ系ほか  
原住民は 2%、アフリカ系の人はいない

日系人は約 3 万人といわれ沖縄県、鹿児島県の出身者が多い。1908 年、移民船笠戸丸で 780 人が入植。  
当初はブエノスアイレスの近郊で花の栽培、洗濯業、

工場労働者となった。日本語を理解できるのは 3 世まで。

さて、汽船から小さな蒸気船に乗り換えて波止場に上陸し、ロンバルディアのお爺さんと別れた。  
ブエノスアイレスの街は人や馬車でいっぱい、街は碁盤目になっていた。尋ね歩いた家は小間物問屋、マルコの母の知り合いメレリが勤めていた店だった。しかし、女店主は「前の店主は商売が上手く行かなくなって逃げ出しもう死んだらしい」との返事、真っ青になるマルコ。中庭の女の子がメレリの知り合い人を知っているからその人に尋ねれば何か知っているかもしれないという。その人はメキーネスさんという人と分り、中庭の女の子とその家に走る。だが、メキーネさんは一家をあげてコルドバへ行ったという。お母さんはメキーネさんと一緒にコルドバに行ったに違いないと、その家の紳士はマルコの身の上話を聞いてくれた。そして「この手紙を持ってボカ（ブエノスアイレスの港まち）へ行きなさい。ボカの人の半分位はジェノバ人だ。そこへ行ったら手紙の宛名を捜しなさい。誰もが知っている人だ。その人に手紙を渡せば、ロサリオに発たせてくれ、頼まれた人はコルドバまで旅が続けられるようにしてくれる。コルドバへ行けばメキーネさん一家やお母さんに会えるだろ」と言って何がしかのお金を握らせた。

ブエノスアイレスからコルドバへは陸路を取らず、ラプラタ河を船でロサリオまで遡り、ロサリオからコルドバまでの陸路（370 km、日本橋～桑名間に相当）をとることとなった。

ボカは港。移民船が着く。1536 年、スペイン人ペドロ・メンドーサが初めてアルゼンチンに上陸した地がボカ（口という意味）。入江になっている、このボカに集まってくる兄ちゃん、姐ちゃん達の間から哀愁のタンゴが生まれた。タンゴの発祥地、カミニートは僅か 50m 余の短い小道、朱や青、黄色などの原色のトタン屋根、洗濯物が翻っている。スクラップのような廃船、船具、荒れた倉庫、僅かにモンテビデオとの連絡船が係留されている。かつて移民船で賑わった面影はない。



7 月 9 日通り  
1816 年 7 月 9 日  
アルゼンチン  
独立記念日

ボカ カミニート 7 月 9 日通り 幅：片側 8 車線 長さ 4 km、オベリスクが国道の元標

マルコは帆船に乗って、三日三晩、ラプラタ河の船旅は続いた。帆船を操っているのは三人のジュネバ人の男たちで心強かった。この大河はイタリアの国を 4 倍にしても、この大河の長さには及ばないのです。（帆船は陸伝いを航行したようで）細長い島々の間をも通った。かつては蛇やトラのすみかだったが、オレンジや柳の木が一面に繁っていて、まるで水に漂う森のようだった。夜になると船乗りたちはジュネバの歌を歌い出した。マルコは母親の子守歌を思い出し涙が出た。船乗りたちは、ジュネバの男は世界中股にかけて飛び回っているのだと元気づけた。



ラプラタ河はパラグアイ川、ウルグアイ川、パラナ河を始めとする無数の支流を含む巨大な水系。河口部はウルグアイの首都モンテビデオ。パラナ川とウルグアイ川の合流点を起点とすると延長 290 km。国際河川でパラグアイのアスンシオンまで航行できるが、水深が浅いので、川底船しか航行できない。（Wikipedia）写真はラプラタ河観光船。ブエノスアイレスのセンターにあるパレルモ公園内にある飛行場からモンテビデオまで一時間おきに定期便が飛行していたが、ラプラタ河横断時間は 20 分程度かかった。広島県沼隈町神原秀夫町長（常石造船社長）は 1956 年からパラグアイ、ウルグアイへの移民を促進し、モンテビデオには 2000t 級の船台を建造。パラグアイ商船隊向けのバー

ジを建造、またパタゴニア沖はイカなどの漁場となっており、日本からなどの遠洋漁業船の修繕を手掛けている。

マルコはロザリオに上陸するとボカの紳士が名刺に依頼の言葉を書き込んでくれた宛名のアルゼンチン

人の家を捜した。町は馬や車で大変な混雑。何度も何度も人に尋ねたすえ新しい保護者になってくれるはずの人の家を見つけた。戸口に無愛想な執事が現れて、「ご主人は家族と一緒にブエノスアイレスへ行き一か月は帰らない」という。マルコは事情を話す、執事は聞く耳を持たず邪見にマルコを追い返してしまう。どうするマルコ。ロザリオからコルドバまで汽車で丸一日かかる。手元はほんのわずかなリラしかない。絶望するマルコ。でも泣かない。そのとき救いの神が現れる。移民船で一緒だったイタリア、ロンバルディアの農家のお爺さんと会う。マルコは働ける仕事がないかと願う。手っ取り早く子供が働く仕事はない。ふと思いついたお爺さんはバル（バー）に連れていった。そこでお爺さんは、マルコの身の上話やロザリオの執事に受けた仕打ちを話す。バルの男たちは皆ジェノバの人たちで意気に感じ、お爺さんの差し出した帽子にカンパ、またたく間に 42 リラものお金が集まった。

**ロザリオ：**ブエノスアイレスから 350 km。ブエノスアイレス、コルドバに次ぐ都市。パラナ川西側人口 175 万人（2020 年）交通の要路。日本の国鉄と丸紅の指導で車両、信号機を製造する工場を訪問したことがある。メッシの出身地。

翌朝、マルコはコルドバに向けて汽車に乗った。しかし汽車はからっぽ、晴れた気持ちも、大自然の陰気な光景を前にしては曇ってしまう。人の住んでいる気配の全くない広い平原をつきって走っていく。マルコの服は夏服、南半球は冬で寒い。三人のガラの悪い男が乗り込んできた。おいはぎではないか、なんやらひそひそ話をしている。寒さも加わりガタガタするマルコ。だが男たちはマルコにマフラーを掛けてくれた。**コルドバ**に着き、駅員にメキーネスさんの家を聞いた。教会に行ってみるのがよいと道を教えてくれた。メキーネスさんの家は教会の隣だった。しかし、出て来たお婆さんはメキーネス一家は北のトゥクマンへ行っただけという。ここから 1000 km（？ママ）もあるという。またまた呪われたマルコ。お婆さんは、この先に荷馬車隊があるから頼んで乗せてもらったらという。マルコは荷馬車隊の親方（カバータス）に何でもするからと必死になって頼むが、途中のサンチャゴ・デレステロまでしか行かないという。**コルドバ：**ロザリオから 370 km：人口 150 万人、アルゼンチン第 2 の都市。

マルコはカバータスに何でもするから乗せて行って下さいと必死になって事情を話す。親方は途中のサンチャゴ・デレステロという町までしか行かない。そこから 20 日も歩かなくてはならない。それでもよいのなら乗せてやるという。男たちは馬に乗って鞭で牛を急ぎ立てる。背の低い黒ずんだ木の繁った広い林、昔、塩湖だったと思われる広い窪地、ときどき赤壁に銃眼のような穴が開いた家、はてしない平原。しかし空は晴れわたっていた。男達は使用人とも思っているのか、マルコをこき使った。水を運んでくるのが遅いといって殴られもした。とうとう疲れがたまり病気になってしまうが、親方だけが、面倒を見てくれた。旅は 2 週間続いてトゥクマンへの道からサンチャゴ・デレステロへ向かう分れ道となった。マルコは輸送隊が平原の赤い土埃の中に見えなくなるまで見送った。さすがの男たちはたった一人が残るマルコを見て手をふった。果てしない、いつまでも同じ平原ばかりの続いた長い旅の後、前方に真っ白な峰をいただいた青い山々が高く聳えていた。それはアンデス山脈、南はティラ・デル・フエゴ島から。北はカリブ海まで長く続く山脈。空気がだんだん暖かになっていくように感じる、何軒かの家が、あちこちに散らばって、ときには店があり食べ物を買った。茶褐色をした女や子供が地べたに座ってマルコを見ていた。インディオである。靴は破れ、足の皮がすり向け、慣れない食べ物のため胃が弱った。

しかし、マルコは見たこともない木立や、広いサトウキビ畑の間や果てしない草原を歩き続けた。ついに、会った人に「トゥクマンまで10数キロ」と聞いた。



コルドバ イエズス会修道院



湿潤パンパ オンブの木↑



砂糖工場内部 1985年1月撮影

そのころ、お母さんは病気になってメキーネス家にいた。それにお母のさんはいくら手紙を送っても夫からもいところからもなかった。何か大きな不幸が起こったのではないかと不安が残るばかり。とうとう、やっかいな腸のヘルニアになり15日もねったきりで手術が必要だった。お母さんは「身体がもたず手術中に死んでしまいます。命に未練はありません」と医師おんぶやメスキーナさんに懇願する。

マルコは希望に輝きトゥクマンの町に入った。トゥクマンはアルゼンチン共和国の中で最も新しく開けた賑やかな町、イタリア名がある看板を見て店に入る。「メスキーナさんはここにはいないよ」、またもや愕然、絶叫するマルコ。「メスキーナさんはここから、20数キロばかりの大きな砂糖工場と何軒かの家がある。そこにお手伝いさんがいたよ」。マルコの絶叫を聞いて駆けつけてきた若者が教えてくれた。5、6時間かかるから明日の朝出発したらと店主。マルコは「すぐに行きたい。途中で死んでもかまわない」と。マルコの決心が固いのをみてとると、もう誰も反対しなかった。町のはずれまで一人の男が案内してくれた。マルコは足から血を流しながら森の中を歩いた。そして、遂にマルコは手術に成功した母と再開することが出来たのである。めでたし、めでたし。

トゥクマン；ロサリオから811 km。コルドバから440 km。人口83万人 交通の要路、温暖な気候  
アンデス山脈からの灌漑用水でサトウキビの生産拠点。アルゼンチンの砂糖の7割を生産する。  
近年、繊維や電子機器等工業製品等の生産も行われている。1816年7月9日、リオ・デ・ラプラタ  
連合州の独立宣言がサンマルチン将軍によってなされた。

## アルゼンチン余話



### フォークランド（マルビーナス）戦争。

私は二度の戦争を体験した。1982年3月下旬、ブエノスアイレスに着任した直後、内政に行き詰まったガルティエレ軍事政権が突如、フォークランド島に上陸、占拠してしまった。同諸島の帰属をめぐりイギリス、アルゼンチン間で長年争ってきたところであった。すでにアイルランド系住民が岩手県位の島に2,000人ほど居住し牧畜を行い実効支配していた。当初、アルゼンチンはミサイルでイギリス艦隊を撃破するなど優勢であったが、サッチャー首相は本土から艦隊を派遣し、6月初めフォークランド諸島を奪還、6月14日、アルゼンチン軍は全面降伏した。この間、ブエノ

スアイレスも空爆されるのではないかと噂が流れ、夜間管制が敷かれた。アルゼンチンの報道は大本営発表のようなもので噂が飛び交い不安な3カ月を過ごした。終戦後、今度はインフレが襲った。

同じ頃、チリに駐在していた薮内雄三さん（鎌歩協）が退職後、世界一周船旅をされたとき、フォークランド本島ポートスタンリーに上陸したときの記念としていただいた同島の島旗(?)のペナントである。鮮明でないが羊が描かれている。イギリスはフォークランド限りの通貨、切手も発行している。



#### ハイパーインフレ 100万ペソ札

(1982年当時、世界最高額紙幣)

絵柄は独立の父サンマルチン将軍

1988年率：388%

1989年率：4,924%

収束方法は新兌換法といわれるペソのドル化であった。

参考資料：在日本アルゼンチン大使館、無料画像、Wikipedia